

茅ヶ崎郷土会 写真展

令和5年度の史跡・文化財めぐり

第305回 市内の大山道を歩く-その③(円蔵・西久保) 2023/7/8

第306回 綾瀬市に早川城址などを訪ねる 2023/10/14

第307回 大和市に諏訪神社・深見城址などを訪ねる 2023/12/9

第308回 市内の東海道を歩く-その①(小和田・菱沼) 2024/3/9

相模川河口付近の野鳥たち

サンコウチョウの子育て日記(市内北部丘陵)

今に伝える茅ヶ崎の元風景 赤羽根の里

柳島海岸から見た風景



2023年10月25日（金）13:00～16:00

26日（土） 9:30～16:00

27日（日） 9:30～15:00

茅ヶ崎市民文化会館 A展示室

この写真展は、(公財)茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団主催、茅ヶ崎市共催の「茅ヶ崎、みんなのアートフェス2024」参加事業です。

茅ヶ崎郷土会

ごあいさつ

茅ヶ崎郷土会の写真展にご来場いただきありがとうございます。

昨年度に行った史跡・文化財めぐり、および相模川河口付近と北部丘陵の野鳥、柳島海岸と赤羽根付近の風景写真を展示いたします。

史跡めぐりは、市内2回、市外2回行った記録です。

野鳥は、相模川河口の野鳥と茅ヶ崎の丘陵で見られたサンコウチョウの子育ての様子です。

風景は、柳島海岸と赤羽根近辺での撮影です。

茅ヶ崎郷土会の活動は当会のホームページでもご覧頂けます。スマートフォンやパソコンなどで「茅ヶ崎郷土会」と入力し、検索してご覧ください。

会員募集中です。皆様方の興味や趣味を茅ヶ崎郷土会で生かしませんか。

令和6年10月25日 茅ヶ崎郷土会

令和5年度の史跡・文化財めぐり

第305回 市内の大山道を歩く(円蔵・西久保)

大山道の茅ヶ崎を通過する部分を歩こうと、藤沢市四ツ谷から「田村通大山道」を歩き始めました。その3回目は令和5年7月8日(土)に市内の円蔵と西久保地区を歩き、先は寒川町になるので、最後になりました。

展示した写真と対応させたキャプションはつぎのとおりです。

県内の大山道(江戸時代)

大山不動堂への信仰は江戸時代に大変盛んでした。

東は江戸・房総半島から、北は府中・八王子から、西は駿河(現 静岡県)などから大山に向かう道は「大山道」と呼ばれて、多くの参詣者が通りました。

東海道の四谷から分かれる道は「田村通り大山道」と言われ、今の茅ヶ崎市の中央部を横断しています。

①-1 円蔵の鎮守 神明大神(しんめいおおかみ)

円蔵地区のほぼ中央にこの神社はあります。祭神は天照大神(あまてらすおおみかみ)です。

今から約850年ほど昔、この辺りは懐島(ふところじま)と呼ばれていて、開発したのは大庭景能(おおばかげよし)、その景能の館(やかた)跡に神社が立っていると伝えられています。

①-2 社殿の彫刻 天照大神の岩戸開き

社殿の入り口の上の方に、4人の神様の彫刻があります。アマテラスが怒って洞窟に隠れ、世の中が真っ暗になったので、アメノウズメやタヂカラオたちが扉を開けている場面です。神社で祭る神様がアマテラスであるところから、このような彫刻が作られました。

①-3 岩戸開きの絵馬

明治24年(1891)に作られた絵馬で、神社に保管されています。描かれている神様の数はこちらが多いものの、アマテラスを洞窟から出す絵柄は先の彫刻と同じです。

絵馬を奉納したのは明治・大正・昭和に地元で活躍した神楽師の高橋鯛五郎(たかはしたいごろう)などです。

①-4 懐島景能の館(やかた)を囲む堀の跡

円蔵地区の神明大神は、懐島郷(ふところじまごう)を開発した懐島景能の館(やかた)の跡にあると伝えられています。

写真ではわかりづらいのですが、神社の裏の畠の境目は館を囲んでいた堀跡の一部と言われています。

①-5 景能と為朝の一騎打ち

平安時代、保元の乱(1156)のとき、景能は後白河天皇方、弓の名手の八幡太郎為朝は崇徳上皇方について戦う中で、一騎打ちをすることとなりました。

弓ではかなわないと思った景能は機転を働かせて一命を取り留めましたが、為朝に膝を撃たれました。その場面を神社の境内で、加藤・山本・平野の3会員で演じました。

②-1 了覚庵(りょうがくあん)の跡

庵(いおり)の跡の建物や江戸時代の円蔵村の領主である大田氏の供養塔のほか、庵主たちのものと思われる墓碑、句碑などが残っています。

大田吉正(よしまき)は天正18年(1590)、家康につかえて小田原攻めに従い、翌年5月3日、円蔵村の内に200石を宛(あて)がわれ、村の領主の一人となり、その後子孫は領主の役を引き継ぎました。

②-2 江戸時代 円蔵村の領主 大田氏の供養塔

大田氏の墓碑は2基あり、向かって右の塔に「大田善太夫吉次之墓」とあります。吉次は大田氏5代目で円蔵村に葬られました。吉次は諡(おくりな)を了覚院といい、了覚庵は吉次の菩提の為に建てられたものです。

隣の墓碑も大田氏一族のものと思われますが、詳しいことは分かりません。

②-3 江戸時代 円蔵村の領主 横山氏の供養塔

了覚庵の前の道の反対側に共同墓地があります。その中に、特に古い形の供養塔が四基あります。円蔵村のもう一人の領主の横山氏の供養塔です。

横山一吉(かずよし)が天正18年(1590)に家康から円蔵村内に220石を宛てがわれたことから領主になりました。

②-4 了覚庵のご本尊

今は輪光寺に移して祭られています。中央の阿弥陀如来がご本尊だったのでしょうか。そうすると大田氏は浄土宗か浄土真宗を宗旨としていたことになります。

②-5 法師了覚の句碑

「鳴たつや はや須磨寺の夕念佛」 法師了学
と掘ってある立派な句碑ですが句の意味がわかりません。裏面には、「弘化4年(1847) 往年74歳」とあります。

移築されてここにあるのかもしれません、没後に関係者に依って建てられていて、了覚法師はここに住んで俳句の師匠をやっていたとも考えられます。て

③-1 輪光寺の山門

天慶山地蔵院輪光寺といい、宗派は真言宗、木造のお地蔵様がご本尊として祭られています。

このお地蔵さまは、夏に大山が開かれています。多くの参詣者が通る期間は、大山道の鷺茶屋に出開帳(でがいちょう)されていたと伝えられています。

③-2 寛永17年(1740)の庚申塔

輪光寺の境内にあります。市内には約100基ほどの庚申塔があります。その中で一番古い年号を持っています。また、多くの庚申塔には、見ざる(猿)・聞かざる・言わざるが彫られていますが、その中でもおそらく日本最古のもので、昭和44年に市の重要文化財に指定されました。しかし、「相州宅良郡…」の銘には疑念が残ります。

③-3 輪光寺の扁額

本堂に掛けてある扁額です。茅ヶ崎などで教鞭をとっていた書道家の井上有一の書を元にしたものだそうです。

元になっている井上の書は、先のご住職が井上と同じ職場だったとき、本人から手に入れられたと聞きました。

井上は昭和60年(1985)に亡くなっています。

③-4 飯田九一の句碑

「うたかたを 川の精靈(すだま)に おそまつり」 九一題

輪光寺の境内にあります。江戸時代には西久保村に伝わっていたかつぱ徳利が、静岡県内に移されて、昭和42年に戻って来たことを記念してこの句碑が作られました。しかし、徳利はその後再び移されてしまいました。

飯田九一は神奈川県内で活躍した日本画家で俳人。昭和48年(1970)に亡くなっています。

③-5 龜(かめ)の中のかっぱ

輪光寺の本堂の前に、2匹のかっぱが浸かっている大きなカメが置いてあります。かっぱは人の大きさほどあります。

円蔵地区の隣の西久保地区にはかつぱ徳利の伝説があり、輪光寺にはかつぱの句碑があるところから作られたものでしょう。

④-1 山王社

境内にはいろいろの石造物がそろっています。

鳥居は「山王鳥居」という山王神社に特有の形をしています。また、社殿の両脇には、狛犬に代わって猿の石像があります。向かって左の像は子供の猿を抱いています。この猿の像は東京都永田町の日枝神社の像を写したもののです。

④-2 鶴田栄太郎の句碑とサイノカミ(道祖神)

境内に安永5年(1776)銘の双体道祖神と、茅ヶ崎郷土会発足時からの大先輩、鶴田栄太郎氏の句碑があります。句は昭和27(1952)の大山古道吟行の折、別の場所で読まれたのですが、作者が円蔵の人であることから、双体道祖神(和合神)があるこの地に、昭和54(1979)に郷土会が建てました。写真は道祖神が今の場所に移設される前の撮影です。

⑤-1 西久保の北向き地蔵

北を向いているのでこの名があります。江戸時代の文久2年(1862)にたてられています。

竿石に「右 子権現／北 一之宮／左 南湖」とあり、道しるべになっています。右(西)に行くと萩園の子(ね)の権現、北は大山道に出て一之宮(現寒川町)、左は南湖と彫ってあります。

⑤-2 道の辻の石仏3基

茅ヶ崎市内にはたくさんの石仏があります。道路の拡張などで場所を移されたものもありますが、昔は、道が交わる辻に立っていることが多かったものです。

北向き地蔵のそばにあるこの3基は、江戸時代の安永年間(1772~81)と明治32年(1899)銘のサイノカミ(道祖神)、万延元年(1890)銘の庚申塔です。江戸時代と明治の石仏の形の違いが分かります。

⑥-1 西久保 宝生寺の山門

宗旨は真言宗、市内で唯一の国指定重要文化財の「善光寺式阿弥陀三尊像」がある寺として有名です。

山門に向かって右側にある、蓮華座にすわる石の座像はお地蔵さまで、先に見て来た北向き地蔵の、建て替えられる前の像です。

⑥-2 宝生寺の善光寺式阿弥陀三尊像

善光寺式阿弥陀三尊像は境内の収蔵庫に祭られています。鎌倉時代末期のもので国指定の重要文化財になっています。長野県の善光寺の仏像を模したもので同様のものが各地にあり、独特的の様式をしています。

三尊は青銅製ですが、光背(こうはい)と台座は木造で後世のものです。

⑥-3 善光寺式阿弥陀三尊の特徴

阿弥陀如来の左手の形、両脇の觀音菩薩と勢至菩薩の手の形、および両觀音が頭に載せている冠が、一般的な阿弥陀三尊の様式と違っています。

なお、善光寺の三尊像は秘仏になっていますが、その様式を供えた三尊像が鎌倉時代から各地で作られるようになりました。なお、宝生寺の三尊像の来歴は不明です。

⑥-4 堤の旧三橋家の庭にある善光寺式阿弥陀三尊

市内にはもう一つ、善光寺式阿弥陀三尊があります。

元は赤羽根の大山道沿いに建てられていましたが、今は堤にある民俗資料館(旧三橋家住宅)の庭に移築されています。

文化6年(1809)につくられており、基礎に「信州 善光寺如来」と彫ってあります。

⑦-1 西久保にある大山への道しるべ

県内の大山道には、江戸時代に作られた道しるべが各所にたっています。どこのものも良く似ていて、「大山道」とある石の柱の上に、大山で祭っていた不動明王が座っておられます。茅ヶ崎ではただ一基、西久保の日吉神社のそばにありますが、不動明王の像が失われており、文字も「右大〇〇」としか残っていません。

⑦-2 寒川町一之宮の不動堂にある大山への道しるべ

参考のために、現在の寒川町一之宮の川原口不動堂の境内にある道しるべを掲げておきます。

⑧-1 かつば徳利のお話(かつば徳利広場の説明板から)

かつば徳利の話は茅ヶ崎では大変有名です。かつばがくれた不思議な徳利は本当に有つて、江戸時代には、大山参詣者への見世物になっていました。西久保村でその徳利を見たという記録を江戸の人が残しています。

⑧-2 かつばと一緒に記念撮影

徳利をくれた河童が居たという間門(まかど)に「かつば徳利ひろば」ができました。私たちはこの広場で、この日のめぐりを無事に解散しました。

第306回 綾瀬市に早川城址などを訪ねる

市外の史跡を訪ねるではここ数年、県内の古い城跡を探訪しています。

第306回は、令和5年10月14日(土)、綾瀬市早川の早川城址などを訪ねました。

相模原台地と早川の地 江戸時代の様子

早川城址は相模原台地の南の端にあります。この台地の西を目久尻川が流れ下り、川沿いに耕作地が開かれています。目久尻川河畔の一画に今は綾瀬西高校があります。校舎建設の工事中に遺跡が見つかり、宮久保遺跡と名づけられました。川の西側は座間丘陵で、その頂部に五社神社があります。

①-1 早川城址遠景（城跡は神奈川県指定史跡）

目久尻川沿いのサイクリングロードから、台地上に築かれた早川城址を見上げた図です。城跡は標高46メートルで、目久尻川との比高差は約20メートルだそうです。

森に包まれているように見えますが、頂上部は開かれていて「城山公園」となっています。

①-2 早川城と渋谷重国(説明板から)

平安時代末～鎌倉時代初に渋谷荘を治めていた渋谷重国の築城と伝えられています。平治の乱(1160)で陸奥国に逃れようとした佐々木秀義親子を渋谷荘に保護し、石橋山合戦(1180)では大庭景親に組します。佐々木を捉えろという景親を断った逸話が伝えられています。重国はその後、鎌倉幕府の御家人になっています。

①-3 渋谷氏(渋谷重国子孫)の略系図

渋谷氏は宝治合戦(三浦氏の乱1247年)の恩賞で、太郎重直を相模に残し、弟たちは薩摩国へ移り、代を重ねました。二郎実重の家系は薩摩で東郷氏を名乗ります。

早川城は、相模に残った重直の子孫が作ったと考えられています。

①-4 早川公園の案内図

早川城址と言われている部分は、城山公園として整備されています。

①-5 城山公園の桜の広場

もとからこのような広場だったかどうかは不明ですが、城の「主郭(しゅかく)」だったと説明されています。

①-6 物見塚(東郷氏の故地の碑)

「桜の広場」の一画にこんもりと土を盛り上げてありました。

その頂上には昭和7年銘の「東郷氏祖先発跡地碑」と彫りつけた石碑が立っています。
「東郷平八郎が出た鹿児島県の東郷氏の祖先が起こった土地」という意味でしょう。

①-7 物見塚と東郷氏(説明板から作成)

「塚は江戸時代初期以前に築かれた。敵兵を見張るための塚だっただろう。日露戦争当時、旧日本海軍元帥(げんすい)だった東郷平八郎の先祖は、鎌倉時代に、この早川の地から薩摩の国に移った渋谷氏の子孫」と書いてありました。

①-8 早川城跡 遺構の説明図

城跡にたててある説明板です。

城の範囲は分かりませんが、青い線で囲まれた部分が神奈川県の史跡指定を受けているそうです。

曲輪(くるわ)とされている緑色の点線で囲まれたところが二か所ありますが、曲輪全体ではなく発掘地点のことでしょう。土壘は茶-色で、堀切がピンクの線で示してあります。

①-9 堀切と土壘(説明板による)

早川城は「砦(とりで)」であったろうと書いてあります。

台地の先端にある城は北側だけが平たんであったために堀切と土壘で囲まれていたそうです。

武士たちが常駐した施設ではなく、外敵が現れた時のみ使われただろうとも説明されています。

①-10 堀の跡の画像(説明板の図)

図のようなくぼみが、城跡の北側に直線状に残っていました。

①-11 土壘の跡(説明板の図)

説明板にある写真のような土盛りが城の主郭とされる「桜の広場」の周りにあります。

①-12 火舎(かしや)片の説明板

火舎とは火鉢のことです。壊れた火鉢の破片が、城跡の北西部の腰曲輪にあった建物跡から見つかったそうです。

火舎の陶片は14世紀ころ(鎌倉時代後半～室町時代)に作られたものと判定されているそうです。この破片を元に、早川城のあった時代が想定されている重要な遺物です。

①-13 四阿(あづまや)がありました

公園の出口は和様の庭園風になっていて、池とあづまやが設けてありました。

キンモクセイが香る屋根の下で昼食としました。

②-1 宮久保遺跡 神奈川県指定史跡

高等学校の建設に伴う昭和56～59年の事前発掘調査で、旧石器時代から近世（江戸時代）にかけてのたくさんの遺跡が発見され、宮久保遺跡と名づけられました。

②-2 宮久保遺跡とは（現地の説明板から）

中世の遺構では12～15世紀の館跡（やかたあと）や「藤原頸長」の銘文がある渥美焼の壺（経塚壺の外容器）などが発見されています。

古代（奈良・平安時代）では建物の跡や井戸などが、その井戸から木簡が発見されています。

②-3 宮久保遺跡（説明板にある中世の館跡遺構の図）

中世の武家の屋敷跡と考えられています。

堀で区画された中にある建物跡は母屋、納屋、馬屋、その下方の建物は高床式で蔵あるいは武器庫、左上に見える比較的小型の建物は家人（けにん＝従者）の住まい、納屋などだそうです。

②-4 出土した木簡の図（神奈川県指定重要文化財）

木簡には「天平五年（733）九月」の年号と「鎌倉郷鎌倉里」の地名、「田令（でんれい）」「郡稻長（ぐんとうちょう）」の職名、「輕部（かるべ）」という氏族の名が記されています。

鎌倉郡の役所から高座郡に運ばれた稻につけられていた荷札と解されています。

②-5 木簡の説明 現地の説明板から

②-4 の説明文と同じことが書いてありました。

③-1 虚空蔵橋たもとの石仏

龍洞院というお寺に通じる虚空蔵橋のたもとに石仏が集められています。庚申塔が2基、サイノカミ（道祖神塔）1基、道を挟んだ反対側に祠に入った地蔵菩薩です。

③-2 当麻山無量光寺52世靈隨上人の名号塔

その中に相模原市南区当麻にある当麻山無量光寺52世靈隨上人（天保6年：1835寂）の名号塔がありました。寒川町や藤沢市北部より北にしか見られないものです。上人の名が無いので、藤沢の清淨光寺の52世一海上人（明和3年：1766寂）のものと混同されていたことがありました。

④ 龍洞院の福授大黒天

虚空蔵橋を渡ると曹洞宗の龍洞院があります。

境内にあるお堂に「福授大黒天」を祭っています。福を授けてくださる大黒様なのでしょうが、その大きさにびっくりします。新しい制作と思いました。

⑤-1 尾の井（おもいど）

目久尻川の西側の座間丘陵を西に向かって五社神社を目指しますと、神社のすぐ近くに尾の井と呼ばれる池があります。数匹の金魚が泳いでいました。この池は「オモイド」とも呼ばれていて、茅ヶ崎下寺尾にある「おもよ井戸」と名が似ています。共通するものが何かと興味をそそります。

⑤-2 尾の井の説明(現地の説明板による)

茅ヶ崎下寺尾の「おもよ井戸」の説明を除き、⑤-1に記したことと同じことが書いてありました。

⑤-3 五社神社の社殿

神社は丘陵の坂道を登り切ったところにあります。西側は海老名市です。

『相模風土記』に、祭神は地神五座、社地が亀の背のようで亀居山と呼ばれる。本地堂に軍荼利夜叉を祭る、別当寺実像院は本山派修験とあります。

⑤-4 昔の社殿の写真

現在の社殿は昔の社殿を覆うように建てられているそうです。拝殿に昔の社殿の写真があり、複写させてもらいました。昔の社殿は間口3間の「三間社流れ造り」だったといわれており、この写真がそれを表しています。

⑤-5 五社神社の腰掛石

境内の参道のわきに「日本武尊(やまとたけるのみこと)腰掛石」と表示された石が置かれています。『相模風土記』には「尊(みこと)が東征のとき休んだ石」と書いてあります。

⑤-6 茅ヶ崎市芹沢の腰掛神社の腰掛石

茅ヶ崎市芹沢の腰掛神社にもヤマトタケルが腰かけたといわれている「腰掛石」があります。『相模風土記』には「大庭の神が腰かけた」となっています。ヤマトタケルに変わったのは明治時代の神仏分離後のことと考えられます。腰掛石にしろ、おもよ井戸にしろ、同じような話が伝わっていることに興味を覚えます。

⑤-7 腰掛石の前で記念撮影

秋晴れの気持ちの良い一日、無事に綾瀬市早川の史跡めぐりを終わりました。このあと相模線で茅ヶ崎駅に戻り、解散しました。

第307回 大和市下鶴間と深見城址などを訪ねる

大和市には深見城址があると聞き、令和5年12月9日(土)に訪ねました。

① 矢倉沢往還

小田急線鶴間駅を出ると数十メートルのところにバスの発着所があり、左にたどると矢倉沢往還です。この道を東に進み諏訪神社を目指しました。

矢倉沢往還は江戸の赤坂御門から南足柄の矢倉沢に至り足柄峠をへて沼津に通じる、東海道の脇往還として重要な往還でした。

②-1 日枝神社の赤い鳥居

やがて赤い鳥居の日枝神社に着きました。『相模風土記』には「山王社」とあります。

②-2 矢倉沢往還と滝山街道の碑

境内にあった往還の説明碑です。

滝山街道は八王子の滝山城と鎌倉の玉縄城を最短距離で結ぶ戦国時代からの古道で八王子道ともよばれました。日枝神社のあたりは両街道が一つになっています。

②-3 庚申塔2基

小さい方は青面金剛(しょうめんこんごう)の像、大きい方は何が彫ってあったかわからない位に穴ボコです。子供たちが遊びであけた穴です。長いこと横倒しになっていたと思われます。

③ 伊勢社

さらに進むと「伊勢社」がありました。

昔、伊勢講が行われていて、伊勢から勧請したものと思われます。

④-1 諏訪神社 社殿の前で七五三のお祝い

下鶴間地区の鎮守です。下見の日は七五三の参拝者がありました。この神社は相模国式内十三社(平安時代)の一つ、岩楯尾神社(いわだておじんじゃ)と主張されています。

神奈川県内に同じ主張をしている神社が『相模風土記』によると、他に4社あります。

④-2 諏訪神社の元宮

社殿の横に「元宮(もとみや)」と表示して、小さな石のお社(やしろ)が祭っていました。

④-3 元宮の説明碑

石のお社の脇に元宮の説明碑があり、次のように書いてありました。

「ここから東の方、100mほどのところに宮田塚があった。石のお社は岩楯尾神社としてそこに祭られていたが、その地が買収されたとい、諏訪神社の境内に移した。」

④-4 社殿の彫刻 玉厄(ぎょくし)と王子喬(おうしきょう)

社殿は新しく立て直されたのですが、見事な彫刻がありました。

その絵柄は、鳳凰に乗って笙を吹く男性と、飛竜に乗って琴をひく女性です。前者は王子喬、後者は玉厄といい、中国の仙人です。

④-5 地神塔

昔は春分と秋分に近い戌(つちのえ)の日には豊作を祈って地神講を行い、地神塔を立てました。境内の塔は5角形で、5尊の神名が書かれています。茅ヶ崎市内にも地神塔はありますですがこの形はありません。文化12年(1815)に立てられています。

④-6 読めない文字

境内に読めない文字を彫った石碑がありました。

昭和6年(1931)に立てられたものですが真ん中の行の上2文字が変わっています。

さて、何と読むのでしょうか。

⑤-1 鶴林寺

浄土宗のお寺です。境内に不動堂があり、その前には護摩壇のようなしつらえがありました。浄土宗なのになぜ不動様をまつるのだろうかと不思議に思いました。

⑤-2 生き地蔵

祠の中に地蔵様がありました。「生地蔵」とありましたが「生き地蔵」と読むのでしょうか。地下に入って断食して即身仏(そくしんぶつ)となった崇信という人物を弔うために、享和3年(1803)に建立されたと伝えられています。生きながら塚に入り往生を願う「入定塚(にゆうじょうづか)」の事例です。

⑥-1 ふるさと館で一休み

ふるさと館のあたりは江戸時代に矢倉沢往還の宿場でした。商家の小倉家母屋と土蔵を整備し、下鶴間宿のことを展示した博物館施設です。

見学した後に、縁先を借りて昼食を取りました。

ふるさと館の入り口には「ことようか(事八日)」の目一つ小僧と目籠が設けられていました。

⑥-2 ふるさと館に展示してある下鶴間宿地模型

下鶴間宿をあらわしています。

⑥-3 現在の下鶴間

中央の通りが現在の矢倉沢街道です。東を向いて撮影しました。

通りの右手にふるさと館(旧小倉家)があります。

⑥-4 明治4年(1871)に撮影された下鶴間宿

道路沿いに、昔の下鶴間宿を撮影した写真が大きく拡大されて展示してありました。

⑧-1 観音寺の山門

真言宗の寺院です。境内のイチョウが紅葉していました。

⑧-2 観音寺所蔵の地蔵菩薩半跏像(大和市指定重要文化財)

次の⑧-3の厨子とともに、境内にある説明板から画像を取りました。

江戸時代初期の作。大和市内の仏像彫刻の中で、傑作と言われているそうです。

⑧-3 観音寺所蔵の厨子(大和市指定重要文化財)

観音寺には2件の大和市指定重要文化財があります。

その一つ、厨子です。背面に「天文十三年(1544)」と墨書があるそうです。何が収められていたのかは分かりませんが、年号が書かれているのは大変貴重で、2024年から数えると480年も昔のものです。

⑨-1 深見城址遠望

ここまで見学は江戸時代の下鶴間村の範囲でしたが、深見城跡は深見にあります。城跡は森の中でした。

城跡の西側から撮影した写真です。森の先(東側)は急な崖で、崖の下を流れ下っています。

戦国時代までの城はこのような要害の地に設けられることが多かったようです。

⑨-2 城跡の説明板を見る

城跡にはこのような説明板が一枚立ててあるだけでした。

⑨-3 深見歴史の森の案内図(現地の説明板から)

城跡を含む一帯は「歴史の森」として保存されています。しかし、付近には耕作地や森林があり、この図を見る限りでは歴史の森の範囲は分かりません。

写真のほぼ中ほどに、小さい朱色の文字で「現在地」とある場所に説明板が立っています。

⑨-4 深見城址の遺構図

説明板に描かれている深見城の遺構の図です。

境川の流れる東側は急な崖、その反対側の南西方向が城の正面です。「虎口(こぐち)」とあるのは城の出入り口です。「曲輪(くるわ)」は地面を平らにならして建物などを建てたところです。

⑨-5 深見城址の説明

現地の説明板に「深見城は14世紀末から16世紀末ころまで使われ、今に残されている城の構造は16世紀(1500年代、戦国時代)のもの」と書いてあります。

また、『相模風土記』には伊賀入道経光が城主だったと記されていますが、この記載には疑問点があるように思われます。

⑨-6 城跡の様子

現地では、土壘と思われる高まりと、堀跡と思われる溝状の地、曲輪と思われる平らな部分がありますが、これらが遺構図のどこに相当するのは、説明がありません。

⑨-7 主曲輪(くるわ)の跡

木立が切れる向こう側は急な崖です。

⑨-8 土壘(どるい)の跡

高い部分が土壘で、手前の、道に見える部分は堀跡と思われます。

最後に-諫訪神社で記念撮影

大和市の下鶴間と深見の長い距離を歩きましたが、好天に恵まれて楽しい一日でした。

郷土会では市内・県内の史跡を訪ねています。

一緒に歩いてみませんか。

茅ヶ崎市内の東海道を歩く-その①（小和田から菱沼地区の東海道に沿って）

茅ヶ崎を東西に横切って国道1号があります。この部分は江戸時代以来の東海道とほぼ重なっています。令和6年3月9日（土）、小春日和の中を、小和田からその西隣の菱沼地区まで歩きました。

江戸時代の東海道（「五街道分間延絵図-東海道」から）

江戸幕府が作った全国の五街道の絵図です。茅ヶ崎の分は、その「東海道」に、東は小和田から西は中島まで描かれています。

今回歩いた部分に、寺院は上正寺・千手院・広徳寺、神社は鎮守の熊野神社などが見えます。

① 明治天皇御小休所跡の碑

慶応4年（1868）7月江戸が東京と名を変え、9月には明治と改元され、翌年には江戸城が皇居になりました。

京都を発ち東京に向かった明治天皇は、明治元年（1868）10月10日、帰路は12月9日ここで休まれました。それを記念して、昭和36年（1961）にこの碑が建てられました。

②-1 小和田本宿町のサイノカミ

かつて茅ヶ崎辺りでは、道祖神はサイノカミと呼ばれていました。写真は本宿町で祭っているサイノカミです。古い塔が昭和36年に建て替えられたときこのような形になりましたが、この形は市内その他にはありません。サイノカミは「性の神」との解釈でこのような形にしたのでしょうか。

②-2 47年前（1977）の様子

昭和52年（1977）に撮影された写真です。

今は、複雑な道路と建てこんだ住宅に囲まれていますが、令和6年から約50年前は、サイノカミのあたりは広々としていました。ベレー帽をかぶった男性は、茅ヶ崎郷土会の生みの親の一人、故山口金治さんです。

③-1 上正寺を訪ねる 上正寺の山門

龍澤山龍徳院上正寺は浄土真宗。約1400年昔、聖徳太子が自刻の像を残した下寺尾の海円院に寺は始まるといいます。平安末、了智坊道円（佐々木四郎高綱）が小和田に移し、鎌倉時代に浄土真宗とし、寺号も上正寺に変えたと伝えられています。

③-2 聖徳太子の像（茅ヶ崎市指定重要文化財）

寺に伝わる『上正寺略縁起』（元禄15年：1702）に聖徳太子自刻の像とあります。実際には江戸時代初期の作と考えられています。太子が2歳のとき、東を向いて「南無仏」と唱えたところ、合掌している手から舍利がこぼれたときの姿とされ、鎌倉時代から各地で作られています。「南無仏太子」と呼ばれています。

③-3 寛永寺から移された石燈籠（市指定重要文化財）

上野の寛永寺には、歴代の徳川将軍の御靈屋に供えられた石燈籠がたくさんありました。その中から10基が茅ヶ崎にもたらされました。その1基が山門の脇にあります。

延宝9年(1681)に4代家綱の靈前に供えられたものです。

③-4 江戸時代 小和田村の領主 杉浦氏の供養塔

杉浦正友は弓の名手で、家康に仕え、元和6年(1620)に小和田村の領主になりました。境内の墓地に杉浦氏3人の供養塔があり、その中央に「龍徳院殿」とあるのが正友です。寛永2年(1662)卒。正友の院殿号は上正寺の寺号になっています。

③-5 江戸時代 茅ヶ崎村の領主丸茂氏の供養塔

丸茂氏は江戸時代の茅ヶ崎村の領主です。

丸茂家の宗旨は浄土真宗で、そのころ、今の茅ヶ崎に浄土真宗は上正寺だけだったことから、同寺を菩提寺にしました。

元文5年(1740)に没した丸茂利雄の供養塔で、俊雄の戒名が刻まれています。

④ 千手院を訪ねる

天応山千手院神保寺、真言宗のお寺で、元和8年(1622)に開かれました。ご本尊は千手觀音。巨大な回国供養の宝篋印塔や、木食僧觀正の弘法大師帰依碑、石像の弘法大師座像など興味深い石仏があり、本堂には閻魔十王の立像、奪衣婆の座像などがあります。

④-2 閻魔十王像

茅ヶ崎には、萩園の満福寺、南湖の金剛院と小和田の千手院に十王像があります。

千手院の像は、奪衣婆像は座像ですが十王は立像で、立ち姿の十王像は珍しいそうです。

江戸時代末期の作とされています。

④-3 巡礼・回国供養の宝篋印塔

元文2年(1737)に建った宝篋印塔ですが、四面それぞれに「六十六部」、「西国 坂東 秩父」(觀音靈場)、「四国八十八ヶ所」とあり、回国供養、觀音靈場と四国巡拝の集団が建てた珍しい供養塔です。建立当時の千手院の住職の名もあります。

④-4 木食行者觀正 弘法大師帰依の碑

塔の中央に「南無大師遍照金剛(なむだいしへんじょうこんごう)」とあります。「遍照金剛」とは大日如来、あるいは日本の真言宗の開祖、弘法大師のことです。

その横に「木食觀正(もくじきかんしょう)」とあって、菜食修行者の觀正が、同行者と共に弘法大師に帰依するとの誓いを示しています。

④-5 千手院 相模国準四国八十八ヶ所靈場二十四番札所の弘法大師石像

鵠沼村の浅場太郎衛門親子によって、文政4年(1821)に四国八十八ヶ所靈場を模した「準四国八十八ヶ所靈場」が藤沢近辺に作られました。千手院はその24番札所となり、文政4年銘の石造の弘法大師像が祭られています。

⑤ 広徳寺を訪ねる 広徳寺の山門

東海道を挟んで、南に千手院、北に広徳寺があります。共に真言宗で、本寺は藤沢の感應院、本尊は千手觀音です。開山は、千手院は元栄(元和8年卒:1622)、広徳寺は慶海

(寛永九年卒:1632)で、両寺は近くにあって、共通点が多く、特別の関係で創建されたと思われますが、詳しいことは分かりません。

⑤-2 伊勢代参講の講金で作られた六地蔵

6体そろった六地蔵ですが、向かって右から2基目の像が他からの混入と思われます。

中の1基の竿石に弘化3年(1846)の銘があります。伊勢参りの代参講で、余ったお金があったのでそれで建てたという話が伝わっています。

⑤-3 広徳寺 相模国準四国八十八ヶ所靈場第八番札所の弘法大師石像

準四国八十八ヶ所の弘法大師像は形も大きさもほぼ同様に作られています。こちらは文政3年(1820)の銘です。

先の千手院は24番の高知県室戸市の最御崎寺(ほつみさきじ)の、広徳寺は8番徳島県阿波市熊谷寺(くまだにじ)の写しになっています。

⑥-1 熊野神社を訪ねる 鳥居

日本では長い間神仏習合の信仰が行われてきましたが、1868年(明治元年)に神仏分離令が出されて、仏教と神道を分けるようになりました。

熊野神社は『相模風土記』に「村の鎮守なり。千手・広徳の持ち」と書かれていて、江戸時代には両寺で管理・運営をしていました。

⑥-2 「姥母神社」(うばがみしゃ)

明治12年(1879)にまとめられた『皇国地村誌』に、姥島にあった尾根明神社を村内のツト田(正しくは長町)に移したのが姥母神社とありますが、これは間違います。姥神はずっと長町に祭られていて、いつの日かそこから熊野神社の境内に移されました。

⑥-3 姥神様の石像

やしろの中の石造りの姥神です。石祠の中に半肉彫りの姥神があります。先に引用した『皇国地村誌』には「祠の柱に元禄8年(1695)とある」と書いてありますが、その年号は見えません。

市内には、芹沢と今宿にも姥神があり、前の田でも祭っていた形跡があります。

⑥-4 姥島の歌碑

「相模なる小和田が浦の姥島は誰を待つやら一人寝をする」

ある公家が姥島をうたったといわれてきました。昔、伊豆国から、姥島まで領地だと言っていました。この歌が小和田村に有ったので、無理難題を退散させることができたという伝説があります。

大和市の福田には「相模なる福田ヶ原の山姥はいつにいつまで夫(つま)やまづらむ」の歌が伝わっています。姥島の歌とよく似ているのが不思議です。

⑦-1 ぼたもち茶屋と紀州藩七里役所の説明板を見る

このコーナーの最初に掲げた五街道分間延絵図-東海道-の左端に「牡丹餅立場」が記されています。

藤沢宿と平塚宿の間には四ツ谷、牡丹餅、南湖、八幡の立場(たてば)がありました。立場は原則宿泊が禁じられていましたが、旅人が休んだところです。牡丹餅立場では塩牡丹餅を旅人に出していたそうです。

⑦-2 ぼたもち立場と七里役所の説明板

現地の説明板の一部です。上の図は、元禄3年(1690)に作られた東海道分間延絵図で、下の絵は文字を活字に直した図です。立場の辺りの道は砂が深かったとあります。

絵図には記されていませんが、立場の近くには紀州徳川家の情報伝達施設だった七里役所もありました。

⑧-1 寛文3年(1663)の漁場争論裁許図

小和田村と茅ヶ崎村が漁場をめぐって争いました。幕府の裁許があり、手白塚(場所不明)と姥島にある「白石の大岩(烏帽子岩)」を見通して線を引き境目とし、姥島近くの「長者あぐら」が入合の漁場となりました。

このとき引かれた線は「郷境」と呼ばれる道路になっています。

⑧-2 裁許図の写し(水嶋善太郎氏作成)

裁許図を分かりやすくするために、故水嶋善太郎さんが写した絵です。

⑧-3 現在の地図で見る郷境(ごうざかい)

国道1号(昔は東海道)のぼたもち茶屋跡近くから直線道路が海岸まで延びています。

昭和の初期に、この道の脇に、ドイツ人のルドルフ・ラチエンという人の別荘があったのでラチエン通りとも呼ばれています。

⑧-4 国道1号 郷境道の入り口

T0T0 茅ヶ崎工場の東側の交差点を、南方向を向いて撮影した写真です。この日の史跡めぐりの終点としました。

郷土会の東海道めぐり、次は12月14日(土)を予定しています。会員外の方の参加も受け付けます。一緒に歩きませんか。

相模川河口付近の野鳥たち 相模川河口で撮影してきた杉山会員の作品です。

1	ミサゴ	36	ツグミ
2	チョウゲンボウ	37	カシラダカ
3	トビ	38	カワラヒワ
4	ハヤブサ	39	セッカ
5	ケアシノスリ	40	ホオジロ
6	モズ	41	ヤブサメ
7	アオサギ	42	メジロ
8	コサギ	43	オカヨシガモ
9	ゴイサギ	44	オナガガモ
10	ササゴイ	45	カルガモ
11	ダイサギ	46	キンクロハジロ
12	アマサギ	47	コガモ
13	クロサギ	48	スズガモ
14	チュウシャクシギ	49	カイツブリ
15	ハマシギ	50	カンムリカイツブリ
16	ホオロクシギ	51	ミミカイツブリ
17	ミユビシギ	52	キジ
18	ウミアイサ	53	アオバト
19	イソシギ	54	ドバト
20	エリマキシギ	55	イワツバメ
21	オオソリハシシギ	56	コシアカツバメ
22	キアシシギ	57	ツバメ
23	キョウジョシギ	58	ノビタキ
24	ソリハシシギ	59	ジョウビタキ
25	ミヤコドリ	60	エゾヒタキ
26	ダイセン	61	カワセミ
27	コチドリ	62	イソヒヨドリ
28	メダイチドリ	63	オオヨシキリ
29	トウネン	64	オナガ
30	イカルチドリ	65	ムクドリ
31	アカハラ	66	ヒヨドリ
32	アオジ	67	ヒバリ
33	ウグイス	68	ウミネコ
34	シジュウカラ	69	ユリカモメ
35	エナガ		

サンコウチョウの子育て日記

小出在住の朝戸夕子さんの撮影です。

1 ペアで巣作り

5月22日

山道からすぐ脇の高い木にサンコウチョウが巣作りをしました。

ストレスにならない様、見る時は三脚などを使わず通りすがりの数分にし、人だかりにならない様、観察の皆さんと気を付けながら見守りました。

オスの口には巣材が見えています。クモの巣でしょうか。

2 オスの巣作り

5月22日 嘴（くちばし）を上手に動かして巣を作っていました。

3 メスの巣作り

5月22日

4 オスが餌を運んできました

6月16日 オスが餌をくわえています。ヒナが孵（かえ）ったのでしょう。

5 ヒナが2羽

6月16日 見づらいですが、二羽の嘴が見えていました。

6 ヒナを見守るお父さん

6月24日

7 ヒナを見守るお母さん

6月24日

8 ヒナに餌を与えるお父さん

9 巣から出てきたヒナ

6月24日 ヒナが巣の上に出ました。この後、二羽のヒナは巣立った様です。次の日にはどの鳥も居ませんでした。

今に伝える茅ヶ崎の元風景 赤羽の里

相模川河口の野鳥を撮影した杉山会員の作品です。

1 青田と富士

2 赤羽根の谷戸

3 丘陵部への道

4 竹林の道

5 開発が進む

6 赤羽根の丘陵から大島を望む

7 稔(みのり)の秋—その①

8 稔の秋—その②

9 取り入れ

10 ヒガンバナ

柳島海岸から見た風景

ほぼ毎日柳島の海岸に出てラジオ体操と写真撮影を欠かさない郷土会員の撮影です。一年間撮影のたくさんの写真から選びました。選定と編集は平野会員です。

1 初日の出 2024/1/1

2 冬 大波とサーファー 2024/2/16

3 江の島遠望 2024/3/7

4 初夏 ハマユウ 2024/6/24

5 夏 漁船三艘 2024/7/5

6 入道雲 2024/9/10

7 富士 初冠雪 2024/10/16

8 白い鳥帽子岩 2023/12/29

9 流砂の崖 2024/1/14

10 流砂の崖 復旧 2024/6/5

茅ヶ崎郷土会令和6年度 これからの予定**○史跡・文化財めぐり**

- ・第311回 12月14日（土）市内の東海道を歩く—その③
- ・第312回 令和7年3月15日（土）市外探訪（場所未定）

○郷土の歴史民俗勉強会（原則第3火の午後、図書館第1会議室）

- ・11月19日（火）13:30～
 (1) 東海道を歩くその③事前勉強会
 (2) 会員による話題提供

- ・令和7年2月18日（火）13:30～
 (1) 3月に行う市外探訪事前勉強会
 (2) 会員による話題提供

○第52回郷土芸能大会

- ・11月24日（日）13:00 開演 茅ヶ崎市民文化会館小ホール

○郷土会報「郷土ちがさき」の発行

- ・162号 令和7年1月1日発行の予定

○『茅ヶ崎市史』4通史編輪読会

- ・12月3日（火）13:30～ 場所 市立図書館を予定
- ・令和7年1月7日（火）時間 場所は上に同じ
- ・2月4日（火）時間 場所は上に同じ
- ・3月4日（火）時間 場所は上に同じ

郷土会にはいりませんか

郷土史、名所・旧跡などが好きな人たちの集まりです

・市内、市外の史跡文化財めぐり　・郷土史の勉強会　・年間3回、会報『郷土ちがさき』を発行　・年会費 1,500円　・○設立は昭和28(1953)年4月、会員は現在約70名。

問い合わせ 〒253-0008 茅ヶ崎市芹沢2132-2 平野文明

-----<切り取り線>-----

入会希望

(ふりがな) 氏名		
住所	〒_____	
電話番号	(固定)	(携帯)
メールアドレス		
申込日	年 月 日	年度会費を添えて申し込みます。